

「笠戸丸」マルチメディア用ソフトウェア試作資料 (2)

宇佐美 昇 三

Ship of History: The *Kasato-Maru* and Japanese Immigration to Brazil

Shozo USAMI

In January 1905, after a fierce tooth and nail battle, the Russian fortress surrounding Port Arthur finally surrendered to the Japanese. The Japanese Navy captured a number of Russian boats, men-of-war as well as merchantmen. Among those merchantman was the *Kazan* which used to carry Russian soldiers from the Ukraine to Port Arthur. She was about 6,000 gross tons and was built by Wigham-Richardson shipbuilders in 1900. The Japanese navy renamed her *Kasato-maru* and rented her to the Toyo-Kisen Steamship Company. At that time, many Japanese soldiers returning from the Manchurian Front were jobless. Even though Japan defeated Russia, very little was achieved in terms of monetary or territorial gains. Toyo-Kisen used the *Kasato-maru* to transport Japanese immigrants, mostly male laborers four times to Hawaii, Mexico and Peru in 1907. The immigrants worked hard, but soon the United States local governments (e.g. Calif. Hawaii) restricted immigrants from Japan. While in Mexico and Peru, Japanese working conditions were poor. For instance, out of 790 Japanese immigrants, 162 died in the first year in 1901. Japanese immigrants faced totally different customs--the food was new and strange, there were problems with language, but perhaps most life threatening were the tropical diseases and a poor understanding of modern sanitation, so many died soon after arriving.

In 1907, a new treaty was signed between the San Paulo State Government in Brazil and a Japanese company. Japan would send families of immigrants to coffee plantations in San Paulo. In April 1908, the *Kasato-maru* set sail from Kobe carrying 780 immigrants. These were the first family immigrants Japan ever sent abroad, and the first immigrants to Brazil. Unfortunately again, the coffee crops were very poor that summer, and they could not sustain their families on most of the plantations. Here again working conditions were further worsened because Brazilian plantations used to rely on slave labor. With families and no where to escape to, they worked at many different jobs, like railroad construction through jungles and other dangerous types of work. Still, they had hope for a better life, and in this hope, they wrote home inviting their friends and relatives to immigrate to Brazil.

Brazil now has the largest number of Japanese resident in any country other than Japan. Recently, many descendants of those immigrants have come to Japan to work in high-tech industries to support their aging parents. So, in a way, these children of immigrants have "come home." It will be seen in this paper that the *Kasato-maru* played an important role in the history of Japanese immigration to Brazil. Even though she is gone, the effects of her role as a transport are still being felt today as the descendants of her original passengers make their way back to the mother country.

このソフトウェアは、20世紀前半に数奇な運命を辿った1隻の貨客船の年表を軸にさまざまな海事史や移住史上の事件を検索できる。また、これに個人的な記録や研究成果を加えて拡張させることができるほか、クイズやゲームを埋め込んで、エデュテインメントソフトにもなる。本ソフトに使用する多線多節型シナリオについては財団法人工学研究財団の「新コンピュータ支援教育システムに関する調査研究報告書」(委員長坂元昂：1991年)を参照されたい。印刷メディアの制約上、本稿では(注)や「引用」形式になったが、マルチメディアのディスプレイ上では、簡明化が期待される。

明治39年(1906年)

◇ ロイドレジスター：1906-07年：Kasato Maru, 6076総トン (Under deck 4284トン：3696 純トン)：長さ400.5フィート、幅50.4フィート、深さ29.6フィート、：船籍：呉、所有：海軍省。

○ 7月17日：海軍大臣斎藤実笠戸丸・楠保丸維持のため東洋汽船株式会社社長浅野総一郎へ使用せしめ方決済：8ヶ条の命令書起草。

○ 7月17日：海軍大臣斎藤実発：東洋汽船社長浅野総一郎あて：海軍大臣は汽船笠戸丸/楠保丸の使用に関し東洋汽船に命令を為すこと左の如し。軍事上の必要ある時は海軍省で使用。東洋汽船は航海に適すべく維持保存する責任を有す。会社は月あたりの使用料として笠戸丸：4253円20銭を翌月10日に経理局へ納付せよ。

○ 7月22日：呉鎮守府司令長官山内万寿治より「笠戸丸は本日引き渡し候」と届け(呉鎮1554-3)。

○ 8月9日：笠戸丸は長崎を出港し14日香港着『東洋日の出新聞』(8月14日付け)。

○ 8月13日：笠戸丸は糸崎海務署から信号符字を受け取る。過去1年間海軍艦船であったGQSLを改め民間船用のLBJRとなった。

◇ 8月13日付け証書：船首直立、船尾楕円形：量屯下部4362.58トン、上部1804.87トン、甲板間1429.12トン、船尾楼317.87トン、圓室5.00トン、その他囲堯せる部分57.88トン、総屯数6167.45：登録屯数3823.82トン、船員常用370.08トン、機関室1973.58トン、船舶積載度法：量屯：甲板下399尺6寸、幅内49尺1寸、内張り上甲板までの深さ27尺、番号10179(上部・下部の量トンを合わせると総トン数になる。そこから船員室と機関室を除くと登録トン数と一致する。なお、これらのデータは明治43年3月11日付けの国籍証書と多少相違がある)

○ 8月18日付け『東洋日の出新聞』笠戸丸は8月14日に香港着。

○ 8月21日付け『東洋日の出新聞』笠戸丸は過日長崎より香港に回航して同地より支那移民(ママ)を乗せ、来る25日神戸出帆、29日横浜出帆バルパライソへいく。途中ペルーのカヤオ、チリのイキケの2港に寄る(予定)。

○ 明治39年8月24日付け『貿易新報』(『横浜貿易新聞』を明治37年に改題)の広告是这样である。この後にもしばしば登場。

笠戸丸：6170トン、船体壮大、船室美麗：8月25日神戸発：8月29日横浜発南米カヤオ、イキケ、アリカ、バルパライソ、横浜市海岸通5-20東洋汽船会社；神戸市浪花区56番地東洋汽船会社出張所。

○ 8月29日付け『貿易新報』に「29日出帆予定を都合により30日正午に延期した」という広告がでる。30日の広告でも笠戸丸の行き先は依然、南米である。

○ 8月26日：笠戸丸は神戸を出港・横浜経由でホノルル行き移民646人を運ぶ。

笠戸丸の出発に際し、神戸で摩擦があった。『日本外交文書』(明治39年、31、ハワイ移民雑纂、#1039：pp. 292-294)には服部一三兵庫県知事から林董外務大臣あてに8月28日付けで要旨・下記の報告がでている。

神戸の回漕業者が、居留地のシャルジュール・レユニエ会社と話し合い、同社が南米航路に当てている「アミラル・ジュペレー」を臨時にハワイに寄港させ8月25日出帆の予定で移民の眼病の検診を始めた。しかし、移民業者日向輝武が脅迫的行動をして移民が乗船予定数に達しなかった。東洋汽船は自

社独占航路をフランス船に侵害されるのを恐れ、南米航路に予定していた笠戸丸を臨時ハワイ行きにし、運賃を45円に下げた。これに対してフランス船も運賃30円に下げたので、当局が移民の自由意志を確認したところ、移民でフランス船を希望する者はなく、全員が東洋汽船を希望した。この結果、東洋汽船が、保証金4000円を負担し、運賃は1人45円で26日午後5時神戸を出発した。フランス船は26日正午移民を乗せずに出港した。兵庫県知事が調べたところ、回漕業者および移民同盟会出張所の関係者に疑わしい点があり、実際の運賃は39円以下で差額は業者間で分けた模様。

◎明治39年8月30日：笠戸丸は横浜発ハワイに向かう。『海商通報』9月1日付け（笠戸丸：第1回移民輸送）。この日の天気予報は「南の風、晴」。

◎9月1日付け『海商通報』（笠戸丸は）バルパライソまで延長の予定は大地震のため海陸とも商業中止。にわか同港への寄港をみあわせる。幸いに太平洋郵船とフランス船アミラル・ジュプレー（ママ）との競争の結果、（笠戸丸は）ハワイへ寄港することになり貨物はもちろん神戸から移民658人、横浜から100人を乗せてゆく。定期よりも1日遅れ一昨日（8月30日）昼、横浜を出港せり。

●バルパライソの大地震は、当時の新聞によれば約1000名の犠牲者がでる激しいものだった。横浜・ホノルル間は、時速10ノットで15日間の航海である。笠戸丸は9月14日ごろホノルルに入港したと推定される。

◎9月1日『貿易新報』（のち『横浜貿易新報』と改題）「つきぬ密航：長野県の某は30日午後南米チリ向け出港の東洋汽船笠戸丸にて密航を企て石炭倉庫に潜伏していたところ、水上警察の臨検で発見され、引き降ろしの上、検事局に送らる。」

これにより30日が笠戸丸出港と確認できたが、この時点の記事でも笠戸丸の行き先は南米となっている。

◎9月13日付け『海商通報』笠戸丸は8月30日ハワイ行き。

◎9月22日：海軍は笠戸丸の符号 GQSL を廃止すると通達（達121）以後は民間の LBJR を使用。

◎12月15日付け『海商通報』笠戸丸は神戸に碇泊中（但し、雑誌の発行日は当日の船の動静ではない）。

◎12月22日付け『海商通報』笠戸丸は神戸から香港へ回送中。

◎12月25日付け『海商通報』笠戸丸は香港にあり。支那移民（ママ：日本の移民はまだ？）を乗せて、すでに1回航海済み。

◎12月27日付け『海商通報』は大意、次のように報道している。

笠戸丸の出帆日変更：1月2日神戸発 1月6日横浜発の予定を12月31日神戸発、1月4日横浜発に変える。森岡真氏の移民600人を乗せる。帰航の積荷は大いに見込みあり。往航は欧（米）経由なのでまだない。これが第5回南米行き（ママ）。

◎12月31日付け『横浜貿易新報』広告「笠戸丸6,000トン設備完全、待遇親切、12月31日神戸発：準備完全、待遇親切、1月4日横浜発でイキケ、カヤオ行き。」

明治40年（1907年）

◇ロイドレジスターブック：1907—08年：Kasado Maru：6167総トン（Under deck 4363トン：3823純トン）Filmer 船長、要目は前年に比べ総トン数が91トン、Under Deck で170トン：純トン数で127トン増加したが、その他の要目は1909—10年（明治42—3年）まで変わらない。1907—08年のロイドが船名をカサドマルと濁った最初の例である。但し日本の船名録は同年も清音を使用。ロイドも、この1年以降は Kasato Maru と清音で表記している。ちなみにロイドの Kasado Maru という表記は1919—20年（大正8—9年）から定着する。海図の笠戸島は当時カサトと振仮名、のちカサドとなる。

◎明治40年1月4日付け『横浜貿易新報』南米航路出帆広告「笠戸丸：総トン数6千余トン：設備完全、待遇親切：1月4日南米カヤオ・イキケ行：横浜市海岸通5丁目2番地、東洋汽船株式会社、神戸市浪花町56、神戸出張所：弊社発行＜南米渡航案内＞改定再版出来、渡航上無二の好指針なり。郵券2銭封送あらば無料進呈す」以下数回掲載。

◎1月4日：笠戸丸は南米ペルー移民452人乗せ横浜発（笠戸丸：第2回移民輸送）笠戸丸乗船名簿によれば森岡扱いの契約移民が静岡県84人、広島44、熊本38（男37、女1）福岡34、岡山3計203人、熊本以外はすべて男性。カニエテに入る。第1回明治移民合資会社取扱移民が滋賀県79人、沖縄64、福島52、山梨41、新潟13、小計249人で総計452人である。また、笠戸丸乗船名簿によれば出港は明治40年1月5日（ママ）横浜港・2月8日にカヤオ着。

以下、#は『日本外交文書』活字本の項目番号である。

○2月8日：笠戸丸はペルー国リマの外港カヤオ港着、このあとセルロアスール港、モエンド港を回る。

（注）いずれもペルーの港でカヤオ=Callao, セルロアスール=Cerro Azul, モエンド=Mollendo.

○2月8日：笠戸丸は『日本外交文書』（明治40年＜秘露移民雑纂（二）森岡真扱関係：#1536.p.783）によればペルー国カヤオ港着、ここでは移民の途中逃亡と密航帰国事件が起きた（以下{秘露=ペルー}を省略する）。

明治40年4月15日付けリマ駐在の今村良治外務書記生から外務省通商局長あて6月4日接受「森岡扱い移民についての報告」『日本外交文書』明治40年：#1536.pp.783—785の要旨は次のようである。

笠戸丸には明治移民合資会社の関係者が数人添乗していた。森岡扱いの移民には確実な監督者がいなかったの、「森岡は移民に不親切だ」と森岡扱いの移民に商売敵の悪口を吹き込んだらしい。このため笠戸丸がカヤオで検疫のため数日間停泊している間に静岡出身の移民11人、熊本移民2人計13人が逃亡した。そのあと、搜索の結果、静岡6人、熊本1人は早めに見つかったが後の人は逃げおこせた（これは明治40年5月9日参照）。笠戸丸は2月18日セルロアスール港に着き、残る移民は英国精糖会社に属するカニエテ耕地に入った。ここは第1回移民以来の日本人が働いている。

○明治40年4月15日付け（上記と同日）リマ駐在の今村良治外務書記生から外務省通商局長あてに明治移民合資会社の取扱移民250名について報告（『日本外交文書』明治40年：#1547：pp.810—811）がある。要旨は次のようである。

①砂糖黍耕地行き150人と②「タムボパタ・ゴム園行き100人は2月8日笠戸丸でカヤオに着いた。だが③砂糖黍耕地の雇主は「雇用契約は去年の9月に切れた」として、すでに森岡第3次移民101人を雇ってしまっている。明治移民合資会社が「リマの代理人に命じて今年の1月まで移民供給期限を延長した」という話と事実とは違う。リマ駐在の代理人・田鎖吉郎は、百方奔走して110人を綿耕地、40人を別の砂糖黍耕地に周旋した。移民と移民取扱人の契約に変更はないが、移民取扱人と雇主の契約は多大の影響があり、移民会社は雇主に大幅に譲歩したらしい。今後、当局は移民会社の契約書を提示させ、奸黠な（＝カンカツ＝ずるがしこい）移民会社が当局を瞞着しないように注意がいる。

①—1) 砂糖黍耕地に入った移民40人は就業後1カ月で多数の病人が発生し、やがて3人が死亡した。移民は耕地替えのため責任者の派遣を要請した。代理人は日本人の医者を派遣し、今村自身も耕地をみて、気候風土は決して悪くない、原因は不摂生と判断し、現地にとどまるように説得中である。

①—2) 綿耕地の110人はペルー人医師が週2回きて病人は少ない。②予定通りタムボパタ・ゴム園に向かった100名は、2月26日に笠戸丸でモエンド港に上陸、日本人医師が付き添って汽車でアレキパ市経由テイラパタに着き、休養後、3月6日そこからタムボパタのゴム園に向かった。ちょうど雨期で監督・医師は馬、移民は徒歩で旅は困難をきわめている。ゴム園への食糧運搬用ロバが不足し、入園できないので80マイル離れたサント・ドミンゴ鉱山へいき、移民は道路工事に使役されている。熱病患者が2人出たが医師付添いでアレキパ市の病院に入院し、親切な親切に看護をうけている。この後の情報は代理人も把握していない。

(注) モエンド港はリマから直線で800キロはなれているペルー南部の Mollendo、アレキパ市は Arequipa、タムボパタ川はアマゾンの上流にあり、奥地のゴム園とはボリビア寄りであろう。笠戸丸は、同船が進水したときの名前 Potosi にちなむポトシ鉱山に最接近した。

●笠戸丸でペルー入りした八木宣貞は次のように回想する (【八木】 pp. 6—13)。【八木】は八木宣貞『50年前後の思い出』1963年：の略である。

到着の翌朝、監督が各戸の扉を鞭でトントン叩いて起こす。薄暗い時から1列横隊に並んで姓名の代わりに番号を与えられ団体に分かれて仕事場に行く。綿つみは百斤位の綿を1俵につめ、それを担いで200メートル先の馬車まで運ぶ。労働者の昼食はパンフランセス8個とビール瓶に水一杯、その水で米をといで油、塩を入れるものもいた。明治移民合資会社とゴム林いき移民100人余りを契約したのはアレキパ市に本部を置く米人経営の「ペルービアン・ラバー・アンド・マイニング・コーポレーション」である。支部をタンボ・パタに置いて、自然ゴムをモリエンドから輸出、一方はサン・ドミンゴ金山を採掘しはじめていた時であった。鉱山の道路工事は樹木を伐採して丸太にし、幅1メートル半の馬の道を作ることだった。雨が降ると馬の脚が泥のなかに50センチも潜り込む。道は鉱山の事務所からタンボ・パタの川岸まで木の舗装道路を作った。それが済むとゴム採取や畑づくり、処女林を切り開いて米づくりをした。

○笠戸丸は明治40年5月2日横浜に帰港 (『日本外交文書』#1538：pp.786—790)。

○5月8日：笠戸丸は神戸発、香港へ (5月11日付け『海商通報』)。

○明治40年 (1907年) 5月9日付け周布公平・神奈川県知事から林薫外務大臣あて「森岡真扱いペルー移民3名密航帰還の事情に付き報告の件」など要旨 (『日本外交文書』#1538既出)。

静岡県の移民3人は一旦カヤオで船を降りたものの、3月14日、笠戸丸が同地に寄港したとき、これに密乗、5月2日横浜に帰った。この3人 (大川...神山...高橋...) によると、森岡移民会社の事務員が昨年12月に静岡県下に来てペルー移民が有望だ、気候は良く、1日4円の収入と説いたので応募した。汽車賃および船賃120円、手数料20円を払い、ペルーのカヤオに着いたが適当な職がなく、収入もようやく1日7—80銭であった。同地は半年以上雨がなく、塵が多く不健康で、渡航者の半数が死亡し、移民会社に掛け合っても、彼らは同情心なく、寝ずに働けと暴言をうけ、やむを得ず密乗帰国した。純朴な地方人 (ママ) のいうことで嘘とも思われないので、移民政策の資料としてご報告する。

○9月3日東京着：7月10日リマ発「今村報告」 (上記問い合わせへの回答の要旨)：

逃亡があったことは、4月15日報告したが、①大川ら3人はその逃亡者である。彼らはカニエテ耕地行きの契約移民であるのでセルロアスールまで笠戸丸に乗船すべきなのに、途中のカヤオで上陸したというのだから逃亡を自白するものである。②森岡代理人は彼らを探したが見つけれなかった。言葉ができないのだから当然、職業も自力では得られない。③契約書に彼らはカニエテに入り、④1日1円以上とある。契約に反してカニエテにいかず、指定外の土地で4円を稼げなくても移民取扱人の責任ではない。⑤1日7—80銭も事実と反し、耕地では1週間に10円以上稼ぐものもいる。⑥ペルーの気候や死亡率も事実と反する。彼らが30数日いた海岸地区に雨がないうのは本当だが、不健康地だというのは想像だろう。移民の死亡率が1—2次で高いのは事実だが半数死亡というのは誇張だ。3次では22人、笠戸丸できた4次では452人中12人が死亡したに過ぎない。⑦当地の移民会社事務員が不親切というが、彼ら逃亡者は一度も社員にあって面会していない。彼らは船中で虚偽の情報を与えられ、不安になって逃げ、弁解するため理屈をつけたと推定する。

○5月14日付け『海商通報』笠戸丸8日神戸発：香港行き。

○5月30日付け『海商通報』笠戸丸5月31日神戸発の予定。イキケ、サリナクルス、南米カヤオへ。

○6月1日付け『海商通報』笠戸丸は6月1日に横浜着 (香港・神戸から)。

◎6月4日付け『海商通報』6月5日、笠戸丸は横浜発メキシコ・サリナクルスー南米ペルーのカヤオ、チリのイキケへ：船長は森傳吉。笠戸丸は香港からカヤオ行きの清国移民696人のほかイキケ行き84人を満載し、貨物は米穀3,000トン。横浜では荷物を謝絶する。東洋汽船は田沼会計課長を出張させ、バルバライソへ航路を延ばす計画。チリの首府サンチャゴと連絡する、船も増やす予定」(笠戸丸：第3回移民輸送)。

(注1) 土屋博靖「笠戸丸考・補遺」『明治村通信』No.62、昭和50年8月発行：によると明治40年(1907年)「6月4日横浜発の笠戸丸はメキシコへ移住者275人を運ぶ。」という意味の記事がある。これについてはあまり裏付け資料がなかった。しかし、外務省外交史料館の援助で次の文書の存在を教えられた。「移民取扱人を經由せる海外渡航者名簿{3門8類2項38号第27巻甲の1}」である。内容は7月4日付け安楽警視總監から林外務大臣あてのもので、679号の2「移民取扱・本年6月中契約移民渡航者名簿・別紙の通り報告とあり、表紙に「明治40年6月4日笠戸丸横浜出帆メキシコ・イキケ行き渡航者名簿」とあり、熊本移民合資会社(東京市京橋区宗十郎町21番地)が6月2日提出している。全員男性267人で鹿児島出身が大部分、現地の仕事は炭坑夫である。

○明治40年7月『旅行案内』康寅新誌社(京橋区)明治40年7月発行、p.73に笠戸丸の記事あり「東洋汽船の『笠戸丸』6167トン、13ノット：上等旅客12人：中等0人？、下等408人：船長：W.C.T.S.フィルマー、事務長：小曾根鉄熊、およそこれらの航海に使用する汽船は船体の堅牢なる装飾の美麗なる希にみる所の飛脚船にして会談室の喫煙室には碁将棋骨牌楽器その他の遊技具よく備わり船客をして鬱旅にあるを忘れしむ…。」

○9月25日：笠戸丸は神戸着・碇泊(9月28日付け『海商通報』による)。

○10月11日：中村通商局長心得より警視總監あてに移民保護法20条の3により笠戸丸の移民輸送の件を許可すると通知。同日：東洋汽船は保証金5,000円を警視庁に納付するよう命令される。

○10月18日：笠戸丸は神戸発：10月19日：笠戸丸は横浜着(10月10日付『海商通報』)

◎明治40年(1907年)10月23日：笠戸丸はメキシコへの移民294人(302人?)を乗せて横浜発：サリナクルスへ：船長は森傳吉(笠戸丸：第4回移民輸送)。

○10月24日付け『横浜貿易新報』メキシコ移民の出発：東洋熊本両移民会社の取扱いに係る墨国炭坑出稼移民(沖縄、鹿児島、滋賀、高知、福島、福岡各県人)302人は23日午後3時出帆の笠戸丸にて同国サリナクルズ港へ向け出発せり。

○明治40年12月17日：在メキシコ吉田美利臨時代理公使から林外務大臣あてにエスペランサス炭坑契約移民到着並びに逃亡報告の件(『日本外交文書』明治40年：第2冊：36：墨国移民雑纂：#1528：pp.766—767)「公107号」明治41年2月3日接受の要旨。「東洋移民合資会社が募集した日本からの炭坑移民294人は11月26日、笠戸丸でサリナクルズ港に到着した。しかし、検疫の結果7人はトラホーム患者として上陸を拒絶され、同船で送還された。287人は同地に上陸後、鉄道で目的の炭坑へ向かう途中、119人が逃亡し行方不明となった。残る168人は12月1日炭坑に着いた。

○11月26日：笠戸丸はメキシコ・サリナクルス着(上記の吉田報告による)

明治41年(1908年)

◇ロイドレジスターブック1908—1909年の笠戸丸：(Kasato Maru)は6167総トン、(Under deck)4363トン、3823純トン、長さ400.5フィート、幅50.4、深さ29.9(19.0)、船名付字 LBJR、番号10179、船長名 Filmer。船名の表記が Kasato と清音の他は前年度と変化なし。

●1月：ブラジルへ自由移民として後日、笠戸丸で渡航する香山(コウヤマ)六郎(注)は叔父土屋員安に南米行きを相談する。『香山六郎回想録』(以下『香山回想』と記す)1976年サンパウロ人文研究所：p.112。

(注2) 香山六郎は明治19年(1886年)1月熊本県出身。熊本済々黌をへて日本大学予科殖民科に籍を置き、

学生雑誌記者をする。後述のように笠戸丸で南米に渡り、耕地生活ののち邦字新聞「聖州新報」を発行。晩年視力を失うが、執筆を続け、1976年（昭和51年）4月サンパウロ市で逝去。

●3月25日：平野運平、加藤順之助、嶺昌、仁平高（注）、大野基尚の「通訳5人男」が東京を出発、敦賀経由でブラジルに向かう（『日本外交文書』明治41年 {『水野』1431} ,p.393）現地で笠戸丸移民受入れのため先発した。当時日本からブラジルへ直接行く便はなかったので欧州経由となる。

（注1）渡辺誠一郎『海外にはばたいた秋田の先覚』五松堂書店、1980年（これによると仁平の名前は「高」、夫人の名前は「綱」が正しい）。

●3月27日：通訳5人男が敦賀発、海路ウラジボに行く（恐らく義勇汽船を使用）。シベリアからポーランド、ドイツ、オランダを経由して英国サウザンプトンから汽船でブラジルのサントスに着く（大野基尚『ブラジルにかけた虹』東洋書房、昭和36年、p.36によれば45日間の旅。鈴木貞次郎『伯国移民の草分け』自費出版、昭和42年、p.259によれば5月9日ごろ到着）。

●3月：香山六郎（23才）は、深川の東洋汽船専務伊藤幸次郎に同社で面会、「ペルーから近く帰港する笠戸丸が明治移民会社の単独移民300人を4月上旬輸送する」ときく。明治植民岩本善治社長を紹介され、青柳有美事務員の計らいで次の旅券下付用の添書もらう。香山は旅券を貰いに本籍地の熊本へ行く。警察官が自宅へ身元調査にくるが、調査を後回しにして自分のペルー行き相談をする。櫻の咲くころ東京に帰る。東洋汽船に顔を出すと「笠戸丸は皇国殖民会社のブラジル行き家族移民を積んでアフリカ回りで行くことになった。ペルー行きは7月までない」と言われる。香山は5月までに日本を出ないと徴兵令にかかるので「4月中旬出港の笠戸丸でブラジル行きに変更する」ことを助言され、水野龍に会う（『香山回想』）。

（注2）水野龍（シゲミのちりゅう）は安政6年（1859年）11月土佐に生まれる。巡査を経て、官界を志すが、のち政治に興味、明治21年慶應義塾卒業。代議士に落選し、移民事業に関心をもつ。（長尾武雄「水野龍とコロニヤ・アルボラダ」『移住研究』No.9：1973年3月：pp.88—96による）香山に会ったときは49才だったろう。

●4月8日：前夜からの大雪で満開の櫻の上に降り積もった。金策をして皇国殖民会社で笠戸丸の特別三等割引運賃165円（通常は200円）を支払う。この日か、やや後の日に香山は皇国殖民会社でブラジル駐在予定の上塚周平に紹介される。

○4月8日付け『海商通報』笠戸丸は横浜発：

○4月7日付け「神戸又新（ユウシン）日報」は笠戸丸の神戸到着を報道している。

○4月11日：笠戸丸神戸で入渠修理：4月12—14日付け「神戸又新日報」は三菱ドック（長期航海に備え船底掃除と家族移住者に船室を改装をしたと推定される）。

○4月14日～23日付け『海商通報』：笠戸丸：森傳吉船長（ママ）は神戸発サントスへ向かう予定と報道。

○4月25日付け『海商通報』笠戸丸は神戸碇泊中、近日サントスへ、船長は森傳吉（ブラジルへ実際に乗ったステイブンス船長の名前はまだ出ていない）。

●香山は、汽車で14日東京発、15日神戸に着き、旅館「備後屋」に宿泊、船の出発は次々に延び、香山らは宿賃の支払いに苦勞する。旧知を大阪朝日新聞社へ訪ね出発延期の理由は笠戸丸の船室改造が遅れているではなく、皇国殖民会社と外務省のあいだに問題があることを知る。（『香山回想』）。

●香山は笠戸丸がシンガポールに寄港したとき、移民船乗船の通信を送るように言われ、香山が朝日新聞ブ

ラジル通信員となる縁が生じた。香山は「吉野屋」「備後屋」などの旅館に待機している移民を観察する。移民は沖縄、鹿児島、福島などの出身で、お互いに言葉が通じない。香山は沖縄の女性移民が短い着物に半天をきて、伊達巻のような幅の狭い帯を締め、手の甲に入墨をしている姿に驚く。

24日から香山は移民会社の事務を手伝い、旅館に缶詰になる（移住者の名簿もなく、出港後の船上で完成した）。別室では移民の仲介業者たちが芸者を上げて大宴会をしていた。27日、移民は水上警察署で査証と入浴消毒を受けた。この間、偶然の事から通訳夫人の仁平綱と一緒にすることが多かった。仁平綱は先発した通訳5人男の1人仁平高の妻である。先発した通訳大野基尚の夫人まつ（松子と書かれることが多い）も同船者だった。2人の夫人は新婚後まもなくで海老茶色の袴をはき、のち船内でも和服だった（『香山回想』pp.112—119）。

○香山達は「はしけ」で笠戸丸に乗り込む。通訳夫人は1等船室、香山達は病室のとなり、船尾の特別3等船室に入る。前甲板で見送りの代議士で皇国殖民会社役員の土井権大（ゴンダイ）が演説し、この後全員で記念撮影をした日本初の家族同伴移民である（香山六郎『移民四十年史』1949年＝昭和24年：p.27）。

（注）移民は家族移住が条件とあって、1000人の予定がなかなか集まらなかった。このため、水野龍らは、政府に納める保証金が払えず、勧誘員は、無理にあちこちで寄せ集めた家族を構成させ、特に沖縄県に目をつけて大勢の移住者を集めた。年齢に大きな差のあるニセ夫婦や、全く血縁がない者まで身代りに家族として組み合わせた。ブラジルで受入れにあたった加藤通訳によると波止場の労働者、酒場の女性など、港周辺の人とも混じっていたらしい。構成家族には農業経験のない人もあり、後日、労働力不足や賃金の分配で紛糾する原因になった。

（人）

	鹿児島	熊本	沖縄	山口	高知	愛媛	広島	福島	宮城	新潟	東京	小計	自由移民	報道された人数
朝日新聞	178	78	327	30	14	21	42	77	10	9	3	789	10	783
毎日新聞	172	58	327	30	14	21 ア	42	77 イ	10 ウ	9	3	763		783
記念誌 かさと丸(男)	123	50	276	18	12	14	32	53	7	6	2	593	7	
同(女)	49	28	49	12	2	7	10	24	3	3	1	188	3	
同(計)	172	78	725	30	14	21	42	77	10	9	3	781 定説	10	791*

*は『海商通報』による。「毎日新聞」は、ア、イ、ウ、印のところの各県名をそれぞれ「愛知、福岡、宮崎」としている。

●50年記念誌「かさと丸」の移住者名簿を元に、筆者が纏めた移住者年齢構成は次のようである。現代の小学校学齢期の子どもは2人に過ぎない。最年長者は安政5年生まれの50才である。家族移住とはいうが19—29才が多く、次がその弟妹相当の10代で計79%を占める。この70年記念誌の名簿は横浜市野毛山の市立図書館でみた船客名簿の写しとは多少違う。横浜の名簿は、サントス上陸後の行き先もはいつており、アルゼンチンへ移動したことなど書かれている。また職業に「大工」とあるのが多い印象を受けた。

生年（明治）	35—41年	29—41年	23—28年	12—22年	2—11年	元年以前	生年不明	合 計
渡航時の年齢	0—6歳	7—12	13—18	19—29	30—39	40	?	
	14人	2	179	437	127	21	1	781〔人〕
百 分 比	1.8%	0.3	22.9	56.0	16.3	2.7	0.0	100.0%

◎明治41年4月28日(火)午後5時55分：笠戸丸(船長名は一部報道によれば森傳吉のまま／実際はA.J. Stevens 船長)は午後5時55分神戸発ブラジルに向かう(笠戸丸：第5回移民輸送)。

水野龍によれば午後5時55分：沖縄移民の一人金城の手帳によればは5：00ごろ：(海外移住センター小池芳一氏の取材による)大阪朝日新聞・大阪毎日新聞の4月29日版では午後2時出港：移民783人搭載。『海商通報』は791人(多分、自由移民を加算)。

○伴走の小蒸気船が「蛍の光」を奏して笠戸丸と別れ、神戸の方へ戻る。香山は淡路島に落ちる夕陽、紀淡海峡、紀伊半島などを見つめる(注1・2)。5時55分神戸抜錨と熊本移民橋口重政の日記にある(香山六郎『移民四十年史』昭和24年、p.28に引用されている。：以下『移民四十年史』)。

(注1)香山は摩耶山に落ちる夕陽や、淡路島南側、鳴門の渦潮をみたように書いている。『和歌山県移民史』p.673をはじめ多くの本がこれを引用している。しかし、紀淡海峡へ向かう笠戸丸からこれらは見えなかった筈だ。筆者は何回か、このコースを航行して確認している。

(注2)黒田公男「源平の古戦場に陽は落ちる：笠戸丸出港前後の数々の疑問...記録中心に」(『移住研究』(No. 27,1990年3月)も摩耶山に夕陽を見ることはありえないと指摘。

●この夜、最初の夕食に日本食がでた。土佐沖にさしかかると小雨、船が大きく揺れ、スクリューが空転して不気味な音を立てた。船員たちは水野からチップが払えず、不満を募らせる。

4月29日：北緯(N) 32.25：東経(E) 132.45(航海距離195浬)(『水野日記』)

以下、正午の位置と航海距離は水野龍の航海日記から引用。ただし熊本県出身の移民で代用教員をしていた橋口重政は日記に180浬と記録している。以下『橋口日記』と記す。それ以外の水野日記に基づく場合は(『水野日記』)：香山の回想録に基づく場合は末尾に(『香山回想』)で表す。橋口重政の妻・谷子は橋口の死後、香山と再婚。香山の『移民四十年史』は『橋口日記』を何回か引用している。本稿はそれからの再引用である。。香山自身は航海中日記をつけていなかったらしい。『橋口日記』は貴重な一次資料だが目下所在不明。

(注3)本稿の『水野日記』は『かさと丸』に採録された「笠戸丸航海日記」pp.19—25から再引用した。「水野の小さい手帳はブラジルのパストス移民資料館にあるはず」とサンパウロ人文研究所の脇坂勝則所長から通信あるも筆者未見(1999年4月24日)。

(注4)特別3等には女2人、子ども1人、中年男4人、青年8人で計15人。(特別3等寝台は2段のようだ)。前甲板の移民船室は蚕棚と板張りの寝床部屋があった。船首から沖縄、熊本、山口、愛媛の家族が入室し、船尾の特別3等の前に鹿児島島の移民がいた。鹿児島・沖縄は波が高く、動揺が激しく船酔に苦しむ人が増えた。左舷の1等船室に大野・仁平両夫人がいて、和服にひさし髪、移民の婦人達と比べ句うような存在『香山回想』。移民は洋服だったようだが、香山の回想記ではサントスの税関や開拓地で和服の記述があり、荷物にいられてはいたらしい。当時の生活様式から考えて和服の持参は当然だろう。

○4月30日 N29.58：E129.00(247浬)(『橋口日記』は247浬とある：これから後の『橋口日記』は水野の記録と一致)左舷に諏訪の瀬島『水野日記』。

なお、N=北緯、E=東経、S=南緯、W=西経のそれぞれ略である。

○5月1日 N25.55：E125.05(243浬)沖縄諸島付近：駿雨『水野日記』。

このころの夜沖縄移民の船室で蛇皮線の音、民謡が流れる『香山回想』。

○5月2日 N26.31：E121.13(222浬)ターンアバントの燈台『水野日記』

(注5)海図で位置を見ると台湾の北：基隆に近い位置だ。前日より北上している。黒潮に流されたのか。5月2日付けの『海商通報』に笠戸丸船長名としてはじめて(A.J.Stevens)スチーブンスが記録されている。

(注6)一等船客の仁平綱は船室で悩んでいた。綱は結婚前に好きな青年Xがあり、仁平高との夫婦仲はし

っくりいっていなかった。青年Xに香山六郎が生き写しで、綱は恋と前途の不安に泣き暮らしていたらしい（「かさと丸」資料より総合）。

○5月3日 N23.30：E117.48（258哩）正午兄弟島（筆者注：中国福建省に近い）をみる。午後3時30分ラバ島を見る。これより数日間島を見ることなし『水野日記』。

（注1）笠戸丸はバシー海峡でなく台湾海峡を通して南支那海に入った。ベテラン船長の松井邦夫氏によるとバシー海峡の強い黒潮を避けて、台湾海峡を選択することは有りえるという。航路の選択は船長に任されている。

○5月4日 N19.38：E115.14（272哩）いよいよ暑気甚だし『水野日記』。

このころ台湾沖通過：前後の甲板に日除けの天幕が張られた。スコールが来る、船客に火夫も混じって相撲大会、翌日は剣道大会が開かれた。相撲は庶民、剣道は武道なので男女の観衆の反応が違う。台湾をすぎると海は穏やかになり船の100メートル近くを飛ぶ飛魚の群れをみる。イルカに追われているのだと船員の説明がある。シンガポール入港前、前甲板に56人入りの水風呂をしつらえ男女別々に全員入浴させる『香山回想』。

（注2）ペルー行きグレンファーク号の松尾小三郎著航海記にたびたび出て来る塩水の水風呂は、ブラジル行きの笠戸丸のときはこの1回だけだったらしい。ペルー行きの時はほとんどが男性の移民なので問題がなかったが、ブラジル行きでは家族づれなので問題が起こるのを避けたのか、入浴設備が他にあったのか不明。

○5月5日 N15.33：E113.05（274哩）この夜、熱度高く寝所に苦しむもの多し『水野日記』。

○5月6日 N11.47：E111.09（252哩）この夜、火夫暴語を發し警戒するところあり。また閑中の一時事なり『水野日記』。

○5月7日 N08.15：E108.48（254哩）夜警戒中の火夫、移民ともに動揺す。（原注）下級船員特に火夫が移民の部屋に忍び、婦女を襲う騒動『水野日記』。

（注3）笠戸丸に先だってブラジルに赴いた通訳5人男の1人大野基尚は、航海中の様子を書いている。夫人や移民から聞いたらしい。その大意は次のようである。

笠戸丸には女性を誘拐し、シンガポールなどに売るならずものが乗り込んでいて船員たちと通謀し移民の娘たちを狙っていた。そのため何か事を構えては船長を脅迫し酒をあおっては乱暴をする。船客の間に割り込んで秩序を乱し、船員を唆して怠業状態に陥れた。船が台湾を過ぎる頃から船長が英国人という弱点もあって船の統制は乱れ、舵手は舵を捨て、火夫は石炭を焚くのを止め（中略）...船内は名状しがたい混乱を来す。悪者たちは通訳の2夫人を『水野は彼女たちをブラジルで醜業を強いるようとしている。われわれはこの不幸な女たちを救いださなければ』と船員や移民を扇動した。その実、悪者は移民のなかの婦人をシンガポールで降ろして仲間に引渡し、何千円という儲けを企んでいた（仁平綱が旅の不安、恋の悩みから泣き暮らしたのも誤解を生んだようだ）。

●児玉正一『移民の父：上塚周平』（サンパウロ市、私家版、1950年＝昭和25年、pp.117—120）は暴漢が日本刀を抜いて幹部を脅迫したという話が書かれている。この伝記では上塚が「私を切れ」と幹部の身代りを買って出、暴漢も「同じ日本人、おまえの首を斬ってもなにもならない」と刀を納めたという。この伝記は、読物の文体であり、上塚自身の手によるものではないが、一騒動があったことは読み取れる。

●香山はいかなる配慮によるものか、回想録に、騒ぎを書いていない。船員と船客が楽しく過ごしていたように読める。香山は同船していた皇国殖民の上塚周平代理人の事務を手伝い、このときは義兄弟になっていた。

●水野龍もまた、この日記はこの日のことを「閑中の一時」と平然としている。もっとも水野は後日、自分が襲われたときも簡単だ。幕末は少年の鼓手として出陣し、若いとき巡査もした水野の神経は太かったようだ。

(注1) 船の速度から検討してみる。「カザン号」のときの笠戸丸はシンガポールから長崎へ北向きコースの約2514哩を9日かかっている。笠戸丸のブラジル航海は神戸からシンガポールへ南向きの台湾コース＝約2600哩(水野日記で2752哩：橋口重政日記で2722哩：260時間)を11日かかっている。南向きの時、5月2日の進路が北西に向い、平均9.2ノットしか出なかった日以外は平均10.6ノットで航走している。距離、潮流、風向きなどが違うとしても、舵手や火夫がそう長時間怠業したようには見えない。

●この騒動について、当時の笠戸丸船員(火夫)・石塚寅次郎氏の筆者あて来信(昭和58年秋)は全く記述がない。船医は日本人であったという。石塚寅次郎氏は山形県鶴岡市三瀬に生まれ、18才で笠戸丸に乗船、ブラジルに行く。昭和58年(1983年)5月13日、当時93才でブラジル政府から勲五等に相当するガバレロ(騎士の意味)功労賞を受賞した。(『山形新聞』昭和58年5月11日付けでは「船員の中で一番若かった。船底で黙々と汽缶部に石炭を運ぶ毎日だった。ブラジルへは行ったが治安が不安定という理由で上陸できず船室にいた。つらい毎日だったが、いまは懐かしい」と語っている。)筆者が子息の石塚知二氏を介した聞き取りでは、笠戸丸にボイラーが8つあり、火夫8人、石炭運び8人で12時—4時、4時—8時、8時—12時の3交代(ママ)、服装はアサギ色のナッパ服、食事は普通だが野菜がなくなるとソーメン汁だった。豆腐は1週間もったのでよく食べさせられた。少年時代に家を飛び出し新庄駅についたら旅費がたりず、10日掛かって上野に着き、鉄道馬車の御者や石炭商の店員を経て汽船会社に就職した。船の中の騒動や脱船事件は記憶にない...ということで、これ以上の情報は聞き出せなかった。

(注2) 食事について、笠戸丸で移住した鹿児島出身の園田猶衛さんは昭和52年に写真家秋山忠右、佐藤晴雄両氏の取材につぎのように答えている。「船中の食事は悪かった。麦飯と魚と漬物が少々で味噌汁がついていなかった。味噌汁を出してくれるよう申し込むと1週間に1度だけ出してくれた」(筆署名なし＝伊藤一男氏と確認：「笠戸丸をめぐる話題集」『海外日系人』第3号、1978年5月 pp.54—58の記述から再引用)。

○5月8日：N04.37：E106.25 (260哩) 午後6時から風雨つる(『水野日記』)。

香山によれば昼シンガポール港外に着く。停泊して港務局の英国人検疫官3人の検疫をうける(『香山回想』)。

(注3) 「娘子軍(売春婦)を隠している」ということでシンガポール水上警察が検査したという記述もある(渡部誠一郎『海外にはばたいた秋田の先覚』五松堂、1980年、pp.140—141)。

○5月9日(土)：午後2時、笠戸丸はシンガポール港に投錨(前日から275哩＝かなり進捗)。

明日栈橋に着く。この夜、火夫が自由移民・片岡治義を襲う風聞あり(『水野日記』)。香山の回想録とは1日ずれているようだ。

(注4) 片岡治義(ハルヨシ)は、明治12年1月10日高知県生まれ、当時29才、海南中学卒(土佐中学とも)水野龍の遠縁で自由移民の1人。土木技師として測量技術を持ち、妻子を連れていて移住者の中で目だつ存在だったのだろう。片岡はこれまた遠縁の高知県出身の西原清東の下で米作農場を経営、1947年、ピメンタ3万5千本の農場経営などで立派な成果を残している(*池田重二『ブラジル日本移民人国記』1958年による)。

●『橋口日記』は次のように記す。

5月9日：午後2時シンガポール港着、本日は沖合いに碇泊、小蒸気船数隻笠戸丸の舷側に来る。

人員調査あり。清人あるいは黒奴（ママ）などの品物売りに来るもの数十隻、皆本船より追いはる。

5月10日：本朝4時ごろ雨降り暫時にして止む。6時ごろ棧橋に着け、石炭及び水積み込み、午後3時半終わりて出航。{現地の人に}銭を海中に投げ与うれば直ちに海に飛び込みて銭を海中より取り来る事百投百取なり。真に驚くに堪えたり（『移民四十年史』 pp.27-28）。

（注1）和歌山県編/発行『和歌山県移民史』：pp.670-680は上記の『橋口日記』を収録しているが、『移民四十年史』から引用したのか、「橋口重雄」と『移民四十年史』の誤記を、そのままである。なお橋口日記の現物を筆者は探しているがまだ見つからない。

○5月10日：笠戸丸の一部船客が舁でシンガポールの棧橋へ：午後3時抜錨（密航者がシンガポールで乗り込む。火夫として使用ことになる）大野によればシンガポール碇泊中、1・2等の婦人船客は船室、3等船客は船倉に閉じ込められて船内さえも歩き回ることを厳禁された。5月のシンガポールは暑く、船倉で5日間（ママ）暮らしたのは苦痛だった。上塚、香山、高桑、片岡、矢崎らはシンガポールで上陸し、植物園を見学している。波止場の中国人労働者が蟻のように籠にいた石炭を船にかつぎこむ。水は布袋の長いのでポンプで直接船の水槽に補給した。その日の夕方、笠戸丸は補給を終りシンガポールを出港した（『香山回想』）。

●香山はシンガポールからも次のケープタウンからも大阪の朝日新聞に通信記事を送っていないようである。回想録では上塚が通信を喜ばない素振りをみせたり、船内新聞に注文をつけたりとある。上塚とすれば、船内で騒動があったので香山を規制したのだろう。

○5月11日：N02.55：E101.00（201哩）。

○5月12日：N05.21：E97.03（250哩）。

○5月13日：N05.30：E94.25（200哩＝難航したほう）大風雨にあう『水野日記』。

○5月14日：N03.22：E91.46（202哩）驟雨時にあり、波高く船酔いに苦しむ『水野日記』。

シンガポールを出てから香山は大野、片岡両夫人の仲介で仁平夫人と2人で医務室に入り、仁平夫人から恋心を涙ながらに打ち明けられる『香山回想』。香山はインド洋通過中、後に香山夫人となる橋口谷子と、彼女の弟の看病をしたことから、知合う。弟とは熊本で学校が同じ。

○5月15日（金）北緯01.25：E89.24（184哩）

○5月16日（土）南緯（S）00.44：東経（E）86.40（204哩）13日以来南風、船の動揺甚だしく船酔い多し『水野日記』。

○5月17日（日）S02.59：E83.56（222哩）しゅう雨。

○5月18日 S05.55：E80.34（233哩）涼風起り動揺少なく暖かし『水野日記』。

●香山の回想録「船内新聞を発行するが3号で廃刊になる。上塚の注意や執筆者の不足、種切れが原因。各県人のスケッチで香山は「沖縄の人は話が込み入って来ると『判りません』」といって黙り込む。敬遠主義の判りませんだ」と書いている。この「判りません」がブラジルへ着いてから耕地で紛争が起きたとき、説得に当たった加藤通訳をいらだたせる一因になる（まだ、ラジオの全国放送がなかった当時、お国なまりの会話は相互理解が大変だったことだろう）。

●このころマダガスカル付近で左舷に火山島を見る（『香山回想』）。

●水野によるとマダガスカル島は5月27日にでてくる。『香山回想』は時系列に記していないようだ。

○5月19日 S07.21：E75.69（253哩）（注2）1日240哩以上は航海順調といえる。

○5月20日 S09.54：E73.69（257哩）。

○5月21日 S12.08：E69.40（261哩）。

○5月22日 S14.15：E66.11（240哩）。

○5月23日 S16.41：E62.22（265哩）。

○5月24日（日曜日）S19.07：E58.28（264哩）午後英領マウリスタ（＝モーリシャス）島を見る（『水野日

記』)。

香山によると、24日の日曜日だったか、笠戸丸の甲板では赤道祭が催される。三味線や尺八の音が流れ、沖縄の空手踊りや鹿児島島の薩摩踊りが披露された。酒に酔った船員の喧嘩もあった。やがて一等運転士が「今赤道を笠戸丸は通過しています」と報告『香山回想』。

(注1) 香山の記述が正しければ笠戸丸が実際に赤道を通過してから8日後に赤道祭が行われたことになる。水野日記で笠戸丸が赤道を通過したはずの16日は船の動揺が激しかった。筆者は赤道祭が17日の日曜日にあったのではないかと推測する。

○5月25日 S21.11 : E54.40 (248浬) 朝仏領セントレウニオン島を視る。周囲約30マイル、砂糖草物を産すという(『水野日記』)。

○5月26日 S23.46 : E50.43 (257浬)。

○5月27日 S28.52 : E46.31 (271浬) 朝マダガスカル島を見る『水野日記』。

このころ香山は右舷で鯨や、左舷で日本の巡洋艦をみる。艦名は不明。

27日(ママ)にアフリカ大陸の山々が右舷に霞のように見えるとクオターマスターがいった『香山回想』。

(注2) 以下ケープタウン着まで香山の回想録は数日、早目に出来事を書いている。

○5月28日 S27.42 : E42.12 (256浬)。

大野基尚の妻まつ5時間ほど行方不明『水野日記』(まつの長女の大野道子さんの筆者への直話によれば乱暴者を恐れ、船長の好意で船長室に隠れていた)仁平綱が知らせ大騒ぎとなる。(仁平綱は航海中に香山六郎に想いを寄せる。しかし香山は熊本県出身の橋口重政の妻谷子と重政の死(1911年=2月16日:マラリアによる)後、しばらくして結婚している)なお、この行方不明騒ぎを香山は記述していない。

○5月29日 S29.23 : E38.00 (243浬)。

○5月30日 S31.04 : E34.00 (230浬)。

○5月31日 S33.04 : E29.13 (272浬) この夜燈台をみる『水野日記』。

○6月1日 S34.24 : E24.12 (270浬) この朝よりアフリカ大陸を見る『水野日記』。

○6月2日 S24.52 : E19.37 (230浬) ケープタウン着港外投錨『水野日記』。

『橋口日記』によれば次のとおりである。

6月2日:午後11時30分希望峰の西麓ケープタウン港に着碇泊、起き出してみれば海岸数マイルの間電灯の輝き数千とも知れず。その夜景の美麗何も言語に絶せり。アフリカ島にかかる処のあるとも思われず。真にシンガポールの比にあらず。

●晩に竜宮城のように町の灯火が何マイルも続く景色を見る『香山回想』。

●6月3日:ケープタウン市内を見学『水野日記』。

この朝、香山は昇り始めた朝日に映えるテーブルマウンテンに見とれる。午前9時、英国の係官がランチできて、船長と話し合い、船客の健康状態を尋ねてあっさり帰っていく。ケーオウタウンへの上陸は船長、事務長、上塚ほか船員2-3人を除いて拒絶され、日英同盟も国と国のものであり、国民と国民の親善ではないと香山は感想をもつ『香山回想』。

以下『橋口日記』による。

6月3日:朝6時起床して見れば夜は未だ明け渡らず。暁の美尚昨夜のごとし。8時より乗客船員一同健康診断あり。午後船より釣魚を試みるものありしに、アジ、サバ、ボラ、等釣る数百尾、人皆争い釣出し船べりには人をもってみだし、魚の多きことも亦驚くに絶えたり。船の縁につきたる小アジ、サバ、まことに船にコケツキたるがごとく見ゆ。船は水、野菜類積み込む。

6月4日:午前9時半頃棧橋を離れ沖合いに碇泊。午後1時出航。昨夜より本朝まで魚釣り絶え間なし。ケープタウンの市街の美なることは、シンガポール等のはるかに及ぶ処にあらず。アフリカにもこのごとき処あるかと驚くばかりなり。宏大なる家の立ち並べる市街の長さ4マイル以上もあらんかとおもわる。後ろには奇形の山々ありてまことに早何ともいいがたし。その山の後ろには金鉱山あ

りと聞く。

○6月4日午前9時港外に出る。波浪高く、船動揺する『水野日記』。

香山によれば港をでてすぐ大西洋の海が荒れ、笠戸丸はローリングが激しく危うく海中へ墜落しかけたり、棚の食器が床に転がったという。船客はまた、船酔いに悩まされた。

○6月5日 S31.49：E14.10 (248哩)。

○6月6日 S30.27：E09.17 (264哩)。

○6月7日 S29.14：E04.38 (252哩)。

○6月8日 S28.10：東経00.36 (222哩) 船の動揺甚だしく棚の上の物が落ちる。

(注) 東：西経の境界を越える。

○6月9日 S27.24：西経 (=W) 04.00 (248哩)。

○6月10日 S26.36：W08.49 (262哩)。

○6月11日 S25.55：W13.43 (267哩)。

移住者のなかに明治28年広島県に生まれた13才の少年移住者児玉良一がいた。笠戸丸がブラジルに近づくにつれ、良一は大切に行李に入れて持ってきた玩具のイムやニワトリを甲板から海に投げ入れた。サントスで税関を通してくれないという大人の話に間を受けたからだ。船の上では船員に可愛がられ、船員食を食べさせてもらったり、ケープタウンで魚釣りをしたり、楽しい思い出もあったのだが、少年の宝物だった玩具の水葬は思いだしても胸がつまるような傷を70才の児玉老人の心に残している (1980年、来日時の各紙誌インタビュー記事や小山明子ブラジル取材テレビ番組などによる)。

○6月12日 S25.20：W18.36 (266哩)。

○6月13日 S25.09：W23.30 (266哩)。

○6月14日 S24.57：W28.27 (264哩)。

○6月15日 S24.46：W33.08 (260哩) この深夜火夫が水野龍を襲おうとし上級火夫に止められ、上級火夫を刺す『水野日記』。(注) 水野は上級火夫=己の命を捨てて水野を助けた人の名前を日記に書いていない。

○6月16日 S24.09：W37.48 (255哩)。

○6月17日 S24.08：W42.20 (249哩)。

○明治41年6月18日(木) (220哩：総行程12,000哩) 晴：午前9時サントス入港、午後5時 船梁着、『水野日記』。

●通訳5人男はサンパウロに待機していて、大野、仁平は笠戸丸から下船する妻たちを出迎えてできなかった。サンパウロ州当局がサントスまでの旅費を出してくれなかったのである。

●6月19日(金) 晴れ、午前3時半移民離床、午前5時朝食、午前7時発、午後4時半列車でサンパウロに向かう。午後6時半サンパウロ着『水野日記』。

●6月21日：サンパウロ市の移民収容所を笠戸丸の布施謙蔵事務長、飯島巽機関長が訪問、設備の立派さに驚く『水野日記』。

●6月22日笠戸丸の船員逃亡者4人が収容所にくる。翌日、船員に引き渡す (『水野日記』)。

□ 通 訳

◎英語には「通訳 (トランスレーター) は裏切り者 (トレイター)」という成句があるという。2つの語学に精通し、両方の立場を正確に伝えるうちに、通訳は、母国語の話者や雇主からいらまれてしまうというのである。笠戸丸のブラジル移民のために先行した通訳5人男も、移民が配置された6つの耕地で、雇主の欧米人と同胞の移住者の間に立って苦勞した。

彼らについては神戸の日伯協会機関紙 (1999年：秋号以下3回) に記す。

東京外国語大学のスペイン語同窓会の河村功・鈴木洪三両氏によると明治33年卒業生に金澤一郎がいる。

『かさと丸』の乗客名簿には、笠戸丸に乗り、そのまま笠戸丸で帰国した「外国語学校の先生：金澤一郎」

という人があり、両氏の資料で明治33年の卒業生と同一人物であることが判明した。金澤は、のち外国語学校教授となり、この人について東京外国語大学の同窓会誌に詳細な伝記があり、戦前は外国語学校の校庭に銅像もあった。留学の代わりに東洋汽船に就職し、この後数年間、南米各国に渡航して、調査や各国官憲との対応に従事した。

香山によれば「金澤は自著の『スペイン語会話』をくれ「船中でこれを勉強しておきなさい。ポルトガル語とは発音がちょっと違うだけで意味はおなじだから」といって数字などを読んで発音のしかたを聞かせてくれた。私は金澤さんにもその後めったに会わなかった」という。船内で講座を開いた形跡はない。乗船以前、金澤は外国語学校の教員（教授以下の職位）であった。通訳5人男の指導にあった可能性はある。しかし、船がサンパウロについてから6月22日に金澤一郎がサンパウロの移民収容所まで脱船船員を探しにきた、と水野や香山は書いているが、通訳5人男と大喜びの再会があった様子はない。なお、スペイン語専門の金澤も通訳5人男も、ポルトガル語では移民の複雑な事情説明はブラジル当局者になかなか通じさせることができず、三浦荒次郎通訳官（外国語学校スペイン語科の出身で現地滞在経験が6人より長い）や鈴木貞次郎が助力した。

雑誌報道「6月18日：笠戸丸はブラジル国サントス着。帰航の貨物は麦粉、ゴム、コーヒーその他相当の戦貨あり」。

○『海商通報』：明治41年8月25日付け：笠戸丸は明治41年7月21日ケープタウンから曲芸師一行を搭載して出帆せる旨通報あり。今月末か来月早々に横浜に到着。

同一号に、「南米航路頓挫」の記事あり、「航路 Steamship line」欄の pp. 2—3 参照。

○8月26日：南阿より帰国中の笠戸丸横浜着

○9月1日付け『海商通報』8月26日：南阿より帰国中の笠戸丸横浜着。

○『海商通報』によると笠戸丸は10月10日付けまで横浜に碇泊。13日付け以降、姿を消す。

◎12月7日：海軍省は東洋汽船の笠戸丸返納の申し出を允許。

◎12月21日：東洋汽船より呉で笠戸丸を返納（呉鎮長官より笠戸丸は係留中と報告。詳細な潜水検査結果を海軍大臣に届けている。）以後約1年間笠戸丸の消息は不明である。

以上、今回も多数の方に御世話になった。文献などなるべく、そのつど記したが、完結時にまとめて記すことでご寛恕を乞う次第である。（第2回終わり）

凡例

◎笠戸丸の大きな動き。

○笠戸丸の通常の動き：または船名がでてくる記事。

●ゆかりのある人物の動きや時代背景、ゆかりの事件など。

◇船の構造などのデータ。

各ページごとに注に数字をつけた。解釈や余談である。●以下の項目はソフトウェアでは、その箇所を意図的に触れたとき現れる「リンク先」である。さらに並行して地図や地誌、僚船の記事や、「笠戸丸」がやがて従事する水産界の動きなどを各年代ごとに用意する。